

《補 論》

大学の時代の《*musica humana*》

—自由学芸の一科としての音楽とその展開のリズムについて—

関 沢 和 泉

中世の大学，たとえば一例としてパリ大学で，数学的四科がどの程度扱われていたか，従来は否定的に回答される事が多かったが，学生を読者としたと推定される Accessus 系テキストの発掘により，例えば音楽について少なくともボエティウス『音楽教程』の最初の二巻は何らかの形でカリキュラムに組み込まれていたといった詳細が近年明らかになり，扱いの程度については意見が分かれるものの肯定的な像が描かれつつある¹⁾。これらのテキストでは音楽について踏み込んだ議論も見られるが，そこには大学の時代に入った事による変化が見られるのだろうか。

近世的音楽像——物体の接触により物理的に引き起こされる音響——に対し，中世的音楽像はボエティウス『音楽教程』第一巻第二章²⁾において示される *musica* の三分区「宇宙音楽」「人間音楽」「器具音楽³⁾」に基づき，例えば1240年頃の著者不明の，数学的四科の区分について要約する次のテキストに見られる様な図式を基礎に置いていたと一般に言われている。

1) O. Weijers, 'La place de la musique à la faculté des arts de Paris', in *Etudes sur la Faculté des arts dans les universités médiévales*, Brepols, 2011, 381-397; *L'enseignement des disciplines à la Faculté des arts*, ed. O. Weijers & L. Holtz, Brepol, 1997 所収の C. Maître, 'La place d'Aristote dans l'enseignement de la musique à l'Université', 217-233 及び K. Vellekoop, 'La place de la musique', 235-238. ボエティウス『音楽教程』全五巻のうち二巻だけは制度的に読まれていた点については，例えば，早ければ1270年代成立と推定される『音楽教程』の或る要約でも確認される C. Meyer (ed.), 'Un abrégé universitaire des deux premiers livres du *De institutione musica de Boëce*', *AHDLMA*, t. 65 (1998), 91-121.

2) G. Friedlein (ed.), Teubner, 1867, 187.

3) 本稿が示すように揺れがあり当時もその意味が自明ではない表現であったと思われるため，あえて座りの悪い日本語に訳す。

(……) 音楽は三様に言われる事が知られなければならない。即ち(1) 世界を構成する諸元素の比例対応関係 *proportio* において成立する**宇宙音楽**。(2) 人間を構成する諸要素の比例対応関係において成立する**人間音楽**と言われるもの。(3) **器具音楽**と呼ばれる、音の比例対応関係において成立するもの。ここで私達が意図する音楽は三番目のものであり、ポエティウスがその権威となる著者だ⁴⁾。

根底に数学的比例対応関係があり、^{マクログコスモス}世界全体レベル・^{ミクログコスモス}人体レベル・物理的音響レベルでのその三つの適用形態に応じて三つの音楽があるという訳である。三者の照応こそ中世的な特徴であり、三つの音楽は同じ一つの形相因とでも言えるような比例対応関係が成り立たせるものだとされ、この図式の背景には聴覚で捉えられる音響を軽視する音楽観があった、といった絵が描かれる⁵⁾。そして、だがアリストテレスの再導入により、ようやく音楽は現在の意味での音響現象へと限定され、思弁の中世から実践の近世・近代へ向かう変化が開始された、と続けられる⁶⁾。

実の所、アリストテレスの再導入が進み、他方でノートルダム学派隆盛後の多声化の進行するこの時代、既に三つの音楽を共に或る種の物理(自然学)的現象として捉えようとする証言が大学に存在する。1245年頃書かれたと考えられている著者不明の *Accessus* 系テキスト『*Philosophica disciplina*⁷⁾』において、音楽の項目は他の項目に比べてやや長い。このテキストは、まず音楽全体について「音楽は『音響 *sonus* における比例対応関係を考察する学問である』と定義される⁸⁾」と述べた後、三区分を次の様に要約する。

音楽の対象は音響ないし鳴り響く数 *numerus sonorus* であるが、この対象に応じて音楽は次の様に三つに区分される。(1) 大気の諸部分を切り裂く光り輝く物体の光線から生じる音楽、(2) 気管に至る氣息 *spiritus* の運動を介して魂によって生じる音楽、(3) 硬いものと硬い

4) *Quatre introductions à la philosophie au XIII^e siècle*, ed. C. Lafleur, Vrin, 1988, 374.

5) 例えば古い所で P. H. ラング (酒井諄他訳) 『西洋文化と音楽 上』, 音楽之友社, 1975 年 (原著 1941 年) 88-90 頁。

6) 例えば *Brève histoire de la musique au Moyen Âge*, Olivier Cullin, Fayard, 2002, 25-30.

7) *Incipit* によるタイトルなので、タイトルを邦訳する意味はないように思われる。

8) 以下引用は Lafleur, *op. cit.*, 267-268.

ものの衝突から生じる音楽。

続いて各々が詳述される。

第一の音楽は**宇宙音楽**であるが、これは天上の物体の衝突によって生じる音響を考察するのではない。それは『天体論⁹⁾』で反駁されているからである。そうではなく互いに交差し大気を分断する天上の物体の光線から生じる音響を考察するのである。しかし、こうした音響は私たちの耳には適合しない(……)。

第二の音楽は**人間音楽**であり、これは気管に至る氣息の運動により引き起こされた音響の比例関係を考察し、そして人間の音声の比例関係を考察する。

第三の音楽は**器具音楽**であり、これは硬い物体同士の衝突により生じる音響を考察する。例えばキタラやその他の楽器におけるような音響を、である。

類似の見解が1230-1245年頃の成立が想定される同様に学生に向けられたテキストである『学生案内 Ripoll 109』においても見られる¹⁰⁾。

しかしボエティウスについての現代の記述に慣れた私達には、以上の3つの音楽の物理的な音響としての定義に、これは『音楽教程』の正しい解釈とは異なるのではないかという疑問が生じるだろう。だが『*Philosophica disciplina*』の著者は以上の解釈を行う根拠を次の様に示すのである。

確かにボエティウスは彼の『音楽教程』の冒頭部分で、このような形で明確には述べていない。しかし、私は信じる。もし私達がボエティウスの音楽論の全体を手にすることができたのなら、以上の様な解釈こそがボエティウスが音楽について意図する所〔だ〕と〔明らか

9) *De caelo*, II, 9 (290b12-291a6).

10) M. Haas, 'Studien zur mittelalterlichen Musiklehre I: Eine Übersicht über die Musiklehre im Kontext der Philosophie des 13. und frühen 14. Jahrhunderts', *Forum Musicologicum*, III (1982), Amadeus, 323-456 の 354-355, 及び C. Page, *The Owl and the Nightingale: Musical Life and Ideas in France, 1100-1300*, University of California Press, 1990 [1989] の 203-204 に書き起こされている。

に) なるはずだと。だが彼が人間音楽と宇宙音楽について語った論考が私達には欠けているのだ。(……) しかしもし誰かが以上の解釈とは別の仕方でも3つの音楽を解説するのであれば、それはボエティウス自身の意図に沿ったものではなく、むしろ他の著者達の意見に基づくものだと私には思われる。

ともあれ、こうしたボエティウスの解釈の変更と思われるものを前にして、先に触れた「中世的な思弁の音楽像の崩壊」が確かにこの時期に早くも始まっていたことが確認されたと言ふべきなのだろうか。その様に解釈している現代の研究者もいる¹¹⁾。確かに上のテキストでも天上の物体による音楽の否定のための典拠としてアリストテレスの『天体論』が引用されている。またこの時期にキルウォードビィ等において、音楽の位置付けが自然学と数学との間で厳密に再検討された結果、その対象が再定義され音楽像が転換されたのも事実だろう¹²⁾。だが人間音楽は人間の音声による音楽だと理解する立場はこれに遡る9世紀から12世紀の複数のテキストにも見られる¹³⁾。実の所それを通してボエティウス『音楽教程』が読まれた、同書への9世紀から12世紀の解釈を様々な層に蓄積させた『大行間・欄外註』においても「musica humana」を定義する一節の「humana」の語に「人間の音声 vox hominis」と註が付けられたものが早い時期から一定数存在している¹⁴⁾。

詳論するには字数が足りないが、これは七科各々の展開のリズムがかなり異なっていたというだけではなく、あるいはそもそも時代を下るほど思弁性が弱くなる、ないし実践と思弁の間の乖離が少なくなるという歴史観に問題が含まれている可能性を示唆しており、人間音楽が人間を構成する諸要素の間の調和ではなく、音響としての声楽を指しているという点に、

11) 例えば E. S. Mainoldi, 'La filosofia della musica nella tarda antichità e nel Medio Evo', in *Introduzione alla filosofia della musica*, ed. C. Migliaccio, Utet, 2009, 24-46.

12) Cf. C. Panti, *Filosofia della musica. Tarda Antichità e Medioevo*, Carocci, 2008, 202-226; F. Hentschel, *Sinnlichkeit und Vernunft in der Mittelalterlichen Musiktheorie*, Franz Steiner Verlag Stuttgart, 2000.

13) A. Morelli, 'Armonia cosmica, musica humana e canto liturgico nel pensiero musicale alto-medioevale', in *Harmonia mundi. Musica mondana e musica celeste fra Antichità e Medioevo*, ed. M. Cristiani et al., SISMEL/Edizioni del Galluzzo, 2007, 145-166.

14) M. Bernhard & C. M. Bower (eds.), *Glossa maior in institutionem musicam Boethii*, I, Verlag der bayerischen Akademie der Wissenschaften, 1993, 85.

直ちにアリストテレス再導入後の音楽（学）の近代化を読み込むのもまた危険なのである。確かにサン＝ヴィクトルのフーゴーの『ディダスカリコン』の様な、一般に今日行われている解釈と同様の解釈を示しているテキストも一方に存在している。しかし、現代の歴史記述においてポエティウスにしばしば割り当てられるこの**思弁的音楽観**という視点は、中世においては、まさにアリストテレス再導入後に、対比的な形でポエティウスに割り当てられる事になったのではないだろうか。その詳細な検証は次の機会としたい。

※本研究はJSPS 科研費 26370083 の助成を受けたものです。